新版（しんぱん）　指導要文集（しどうようもんしゅう）

第一章（だいいっしょう）　信心の基本（しんじんのきほん）

広宣流布（こうせんるふ）

かくのごとく国土乱れて後に上行等の聖人出現し、
本門の三つの法門これを建立し、一四天四海一同に
妙法蓮華経の広宣流布疑いなきものか。
（008 法華取要抄

広宣流布159ページ-6行）

ただし、彼の白法隠没の次には、法華経の肝心たる南無妙法蓮華経の大白法の、一閻浮提の内八万の国あり、その国々に八万の王あり、王々ごとに臣下ならびに万民までも、今日本国に弥陀称名を四衆の口々に唱うるがごとく広宣流布せさせ給うべきなり。

（009撰時抄

広宣流布164ページ－4行）

国主等そのいさめを用いずば、隣国におおせつけて彼々の国々の悪王・悪比丘等をせめらるるならば、前代未聞の大闘諍、一閻浮提に起こるべし。その時、日月の照らすところの四天下の一切衆生、あるいは国をおしみ、あるいは身をおしむゆえに、一切の仏菩薩にいのりをかくともしるしなくば、彼のにくみつる一りの小僧を信じて、無量の大僧等・八万の大王等・一切の万民、皆、頭を地につけ掌を合わせて、一同に南無妙法蓮華経ととなうべし。

諫 もち りんごく かれがれ
くにぐに あくおう あくびくとう 責 ぜんだいみもん
だいとうじょう いちえんぶだい お とき にちがつ て
してんげ いっさいしゅじょう くに 惜
み いっさい ぶつぼさつ 祈 掛
験 か 憎 ひと しょうそう しん
むりょう だいそうとう はちまん だいおうとう いっさい ばんみん みな こうべ ち
付 たなごころ あ いちどう なんみょうほうれんげきょう 唱

（009撰時抄（せんじしょう）

広宣流布（こうせんるふ）165ページー4行）

これをもって案ずるに、大集経の白法隠没の時に次いで、法華経の大白法の日本国ならびに一閻浮提に広宣流布せんことも疑うべからざるか。

（009撰時抄）

広宣流布173ページ－3行

仏の滅後に迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親、乃至天台・伝教のいまだ弘通しましまさぬ最大の深秘の正法、経文の面に現前なり。この深法、今、末法の始め五の五百歳に一閻浮提に広宣流布すべきや

（009撰時抄

広宣流布184ページー3行）

日本乃至漢土・月氏・一閻浮提に、人ごとに有智・無智をきらわず一同に他事をすてて南無妙法蓮華経と唱うべし。このことといまだひろまらず。一閻浮提の内に仏の滅後二千二百二十五年が間、一人も唱えず。日蓮一人、南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経等と声もおしまず唱うるなり。

（010 報恩抄

広宣流布261ページー4行）

日本および中国、インド、さらに全世界において、だれかれとな

く仏法を理解しているいないにかかわりなく、みんないっしょに、他のことをさしおいて南無妙法蓮華経と唱えるべきです。この仏法は、いまだ弘まっていません。全世界のなかで、釈尊がなくなってから二千二百二十五年の「間」、一人も唱えなかった題目です。ただ日蓮一人が、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経と、声も惜しまずに唱えた仏法なのです。

「法華の折伏は権門の理を破す」の金言なれば、終に権教・権門の輩を一人もなくせめおとして法王の家人となし、天下万民、諸乗一仏乗と成って妙法独り繁昌せん時、万民一同に南無妙法蓮華経と唱え奉らば、吹く風枝をならさず、雨壌を砕かず、代は羲・農の世となりて、今生には不祥の災難を払い、長生の術を得、人法共に不老不死の理顕れん時を、各々御覧ぜよ。「現世安穏」の証文、疑いあるべからざるものなり。

（036 如説修行抄

広宣流布600ページ－17行）

「法華の折伏は、権門の理を破す」という天台大師の言葉がありますから、そのとおり最後には、権教を信じている人びとを、一人残らず正しい仏法に目ざめさせて仏の味方にし、世の中の人がみな正法を信じ、妙法のみが栄える広宣流布の時がきて、すべての人が南無妙法蓮華経を唱えていくならば、風は穏やかに吹き、降る雨も洪水などを起こさず、昔の中国の伏羲・神農の時代のような理想社会となり、人びとは災難にうちまかされることのない人生を送り、生命をまっとうして長生きすることができるよ

うになります。人(ひと)も法(ほう)もともに、永遠(えいえん)に栄(さか)えるという道理(どうり)が実現(じっげん)するそのようなときを、みんなで見(み)てご覧(らん)なさい。その時(とき)こそ「現世(げんせ)は安穏(あんのん)である」という経文(きょうもん)の言葉(ことば)が事実(じじつ)となるのは疑(うたが)いのないことです。

この人は、守護の力を得て、本門の本尊・妙法蓮華経の五字をもって閻浮提に広宣流布せしめんか。

例せば、威音王仏の像法の時、不軽菩薩「我深敬（我は深く敬う）」等の二十四字をもって彼の土に広宣流布し、一国の杖木等の大難を招きしがごとし。

（037 顕仏未来記

広宣流布 608ページ-16行）

月は西より出でて東を照らし、日は東より出でて西を照らす。仏法もまたもってかくのごとし。正像には西より東に向かい、末法には東より西に往く。

（037 顕仏未来記

広宣流布610ページ－5行）

月はその出方は西から東へ移り、太陽は東から出て西の方角へ照らしていきます。仏法もこれと同じで、正法・像法時代には、インド、中国、朝鮮、日本と西から東へ仏教が伝わってきましたが、末法には、逆に南無妙法蓮華経の大仏法が、東の

日本(にほん)に出現(しゅつげん)して、西(にし)に伝(つた)わり、全世界(ぜんせかい)へ広(ひろ)まっていくのです。

問(と)うて曰(い)わく、仏記既(ぶっきすで)にかくのごとし。汝(なんじ)が未来記(みらいき)いかん。

答(こた)えて曰(い)わく、仏記(ぶっき)に順(じゅん)じてこれを勘(かんが)うるに、既(すで)に後(のち)の五百歳(ごひゃくさい)の始(はじ)めに相当(あいあ)たれり。仏法(ぶっぽうかなら)必(とうど)ず東土(にほん)の日本より出(い)ずべきなり。

（037 顕仏未来記(けんぶつみらいき)

広宣流布(こうせんるふ) 611ページ-1行）

されば、この経を受持して南無妙法蓮華経と唱え奉るべしと見えたり。

薬王品には「後の五百歳の中、閻浮提に広宣流布して、断絶せしむることなけん」と説き給い、天台大師は「後の五百歳、遠く妙道に沾わん」と釈し、妙楽大師は「しばらく大教の流行すべき時に拠る」と釈して、後の五百歳の間に法華経弘まって、その後は、閻浮提の内に絶え失せることあるべからずと見えたり。

（048 法華初心成仏抄

広宣流布（こうせんるふ）
693ページー7行）

天竺国をば月氏国と申す、仏の出現し給うべき名なり。扶桑国をば日本国と申す、あに聖人出で給わざらん。月は西より東に向かえり。月氏の仏法の東へ流るべき相なり。日は東より出ず。日本の仏法の月氏へかえるべき瑞相なり。月は光あきらかならず。在世はただ八年なり。日は光明、月に勝れり。五の五百歳の長き闇を照らすべき瑞相なり。

（050 諫暁八幡抄

広宣流布 747ページ－11行）

天竺国（インド）を月氏国といいますが、これは、仏が出現すべき国の名です。扶桑国を日本国といいます。どうして聖人が出現しないわけがありましょうか。月は出方が西から東へと向かいます。それはインドの仏法が東方へ流布していくさまをあらわしています。太陽は東から出ます。これは、日本の仏法がインドおよび全世界にかえっていく瑞相（しるし）なのです。月は光が明るくないように法華経はただ釈尊在世の八年間を照らしただけでした。太陽の輝きは月に勝れており、これは五五百歳、末法万年の未来永劫にわたって闇を照らしていく瑞相です。

「畢竟（ひっきょう）」とは広宣流布（こうせんるふ）なり。「住一乗（じゅういちじょう）」とは、南無妙法蓮華経（なんみょうほうれんげきょう）の一法（いっぽう）に住（じゅう）すべきものなり。

（095 御義口伝（おんぎくでん））

広宣流布（こうせんるふ）1074ページ－7行

この法華経を閻浮提に行ずることは、普賢菩薩の威神の力に依るなり。

この経の広宣流布することは、普賢菩薩の守護なるべきなり

（095 御義口伝

広宣流布 1085ページー2行）

この法華経を全世界に行じていくということは、普賢菩薩の力によるのです。この経（三大秘宝の南無妙法蓮華経）が広宣流布するのは、普賢菩薩の守護の力によるのです。

終(つい)には一閻浮提(いちえんぶだい)に広宣流布(こうせんるふ)せんこと一定(いちじょう)なるべし

（096 御講聞書(おんこうききがき)）

広宣流布(こうせんるふ)1135ページ－5行）

たとい、日蓮（にちれん）、死生不定（ふしょうふじょう）たりといえども、妙法蓮華経（みょうほうれんげきょう）の五字（ごじ）の流布（るふ）は疑（うたが）いなきものか。

（125 土木殿御返事（ときどのごへんじ）（経文符合（きょうもんふごう）の事（こと））

広宣流布（こうせんるふ）1298ページー10行）

今、日蓮が時に感じて、この法門広宣流布するなり。

（160三大秘法稟承事（三大秘法抄）

広宣流布1388ページー8行）

いま日蓮がその時であると感じて、この三大秘宝を広宣流布するのです。

正像二千には西より東に流る。暮月の西空より始まるがごとし。末法五百には東より西に入る。朝日の東天より出ずるに似たり。

（162 曽谷入道殿許御書

広宣流布1407ページ－16行）

春の草満少

はるの野の千里ばかりにくさのみちて候わんに、すこし

きの豆ばかりの火をくさひとつにはなちたれば、一時に

無量無辺の火となる。

（249 桟敷女房御返事（無量無辺の功徳の事）

広宣流布 1704ページ－16行）

日本国の中にただ一人、南無妙法蓮華経と唱えたり。これは須弥山の始めの一塵、大海の始めの一露なり。二人・三人・十人・百人、一国・二国、六十六箇国、すでに島二つにも及びぬらん。今は謗ぜし人々も唱え給うらん。また上一人より下万民に至るまで、法華経の神力品のごとく、一同に南無妙法蓮華経と唱え給うこともやあらんずらん。

（251 妙密上人御消息
広宣流布 1711ページー12行）

（日蓮は）日本国でただ一人、南無妙法蓮華経と題目を唱えたのです。このことは須弥山という大きな山をつくっている最初の一塵であり、大きな海の最初の一滴の水と同じです。二人、三人、十人、百人、一国、二国、六十六か国（日本中）まで弘まり、壱岐、対馬にまでおよんでいるでありましょう。今では日蓮を謗じていた人たちも題目を唱えているでしょう。また日本の国の上は最高権力者から下は庶民にいたるあらゆる人びとが、法華経神力品で説かれているように、かならず一同に声を合わせて南無妙法蓮華経と唱えるときがくるでありましょう。

日蓮一人はじめは南無妙法蓮華経と唱えしが、二人・三人・百人と次第に唱えつたうるなり。未来もまたしかるべし。これ、あに地涌の義にあらずや。あまつさえ、広宣流布の時は、日本一同に南無妙法蓮華経と唱えんことは、大地を的とするなるべし。

（280 諸法実相抄）

広宣流布 1791ページ－10行）

最初は日蓮（大聖人）ただ一人が、南無妙法蓮華経と唱えていたのが、二人、三人、百人と、しだいに唱え伝わってきたので

す。未来もまた、そうなることでしょう。これこそ「地涌」ということではないでしょうか。そのうえ、広宣流布の時には、日本国中がそろって南無妙法蓮華経と唱えることは、大地を的にして弓を射ればかならず当たるように絶対に間違いないことなのです。

大悪(だいあく)は大善(だいぜん)の来(きた)るべき瑞相(ずいそう)なり。一閻浮提(いちえんぶだい)うち乱(打)みだすならば、「閻浮提内(えんぶだいない)、広令流布(こうりょうるふ)（閻浮提(えんぶだい)の内(うち)に、広(ひろ)く流布(るふ)せしむ）」は、よも疑(うたが)い候(そうら)わじ。

（363 減劫御書(げんこうごしょ)

広宣流布(こうせんるふ)1969ページ－6行）

そもそも因果のことわりは華と果とのごとし。

千里の野の枯れたる草に蛍火のごとくなる火を一つ付けぬれば、須臾に一草二草、十・百・千・万草につきわたりてもゆれば、十町二十町の草木一時にやけつきぬ。

竜は一滴の水を手に入れて天に昇りぬれば、三千世界に雨をふらし候。

（399 新池殿御消息

広宣流布2056ページー9行）

国(くに)はいかにも候(そうら)え、法華経(ほけきょう)のひろまらんこと疑(うたが)いなかるべし。

（422 大果報御書(だいかほうごしょ)

広宣流布(こうせんるふ) 2144ページー14行）

大事には小瑞なし。大悪おこれば大善きたる。すでに、大謗法、国にあり。大正法、必ずひろまるべし。

（423 大悪大善御書

広宣流布 2145ページー6行）

大きなことが起きるときには小さな前兆では済みません。大悪が起こればかならず大善はやってくるのです。すでに大謗法が国に充満しているのですから、次は大正法がかならず弘まっていくにちがいありません。